

## 音・五感

## 8. 平野（大阪府大阪市平野区）

## 社会

平野は、大阪市の東南部に位置し、市内第1位の人口、市内第3位の面積を有する区である。昭和49年（1974年）の分区により、平野・喜連・長吉・瓜破・加美の地域を含む平野区が誕生した。

平野という名は、平安初期に坂上廣野磨の領有地となり、「廣野」が訛ったといわれているが、別に、かつて広く平らな原野であったことから「平野」になったともいわれている。

平野は、戦国時代からまちの周りを濠で囲む環濠を形成し、町民合議でまちを運営する自治都市として、堺と共に繁栄してきた。江戸時代は、綿の栽培及び集散地として栄え、明治時代には綿業の町に発展した歴史がある。このような経緯から、ワタの花が区の花に選定されている。

平野には、製綿と並んで、古くから地場産業として発展した「銀引き鏡」がある。現在、伝統産業としてその技が受け継がれている。

特産物には、平野飴、平野蒟蒻、平野酒などがある。

## 自然

大阪市の中央部からやや東よりに、南北を縦貫する上町台地がある。この上町台地は、南北9km、東西2kmにわたるもので、東側に緩く、西側に急斜をなしているため、大阪市の東部は概して地盤が高く、西部に向かうに従って低くなっている。

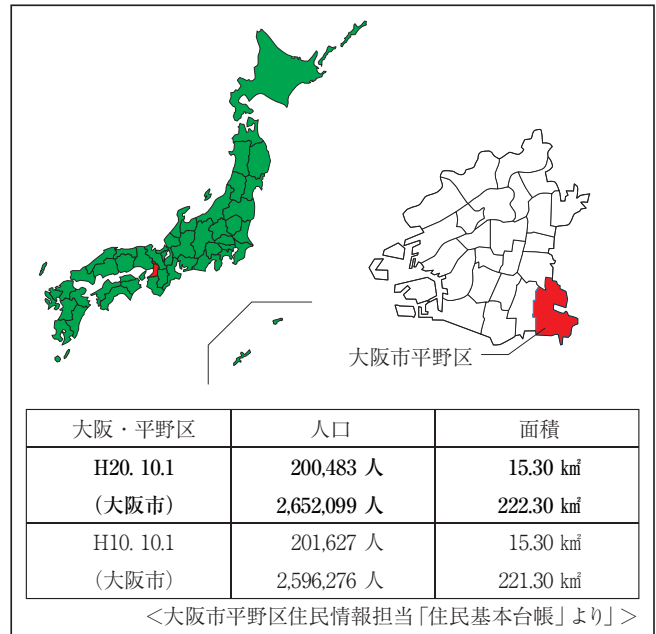
大阪市内には、琵琶湖を源とする淀川から分流して、大小多数の河川が縦横に貫流している。特に淀川をはじめ、神崎川、大和川、寝屋川などの大きな河川と海に囲まれた大阪は、市街地のほとんどが平坦な低地である。

また大阪市内には969の公園（9,306,743㎡）があり、そのうち65の公園（306,478㎡）が平野区にある。

杭全神社にある樹齢850年以上と伝えられるオオクスの木は、大阪府の天然記念物に指定されている。

## 気候

大阪は、年平均気温が16.5℃、年間降水量が1,306.1mmであるが、晴天の日が多い春と秋には、接地逆転層が形成され、霧や濃煙霧が発生することがある。



## 風土

平野区の中心部に位置する平野は、大正時代まで「平野郷」と呼ばれ、約1キロ四方の小さな地域である。かつて平野郷は、周囲に濠をめぐらして、排水や外敵に備えた環濠集落を形成していた。当時まちを取り囲んでいた環濠のほとんどは埋め立てられたが、曲線型の道路や、環濠の出入口であったことを示す地蔵堂などが、面影として残されている。また濠は平野川ともつながり、杭全神社東側には平野川を上下する柏原船が発着する船溜があったといわれている。

平野では、元和2年（1616年）に行われた町割りがそのまま継承され、旧環濠内は当時のままの格子状の街区になっている。また、江戸から昭和初期にかけて建てられ、時代ごとに階高や間取りに特徴のある伝統的建物が数多く残っている。

平野区では数多くの古墳や遺跡が発見され、なかでも船形埴輪・家形埴輪など33点の埴輪は、国の重要文化財に指定されている。特に船形埴輪は、大阪市制100周年を記念して「古代船なみはや」として復元され、平成元年に韓国プサンまで実際に航海した。

## 文化

毎年5月1日～5日、大念佛寺では、「万部おねり」と呼ばれる「阿弥陀経万部会菩薩供養」が行われる。もともとは奈良県当麻寺の練供養を模して始められた行事で、菩薩が橋の上を往還し、現世と浄土を行き来するさまを表しているという。また5月18日には、長寶寺で「閻魔まいり」が行われる。この日は、一年に一度だけ姿を現す閻魔大王の御開扉日で、閻魔大王の御判を額に押しもらえば極楽へ行けると伝えられている。7月には、「けんか祭」とも呼ばれる「だんじり祭」が4日に亘って行われる。

## 作成にあたって参考にした文献

気象庁 <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

おおさか・あんじゅ・ネット <http://www.sumai.city.osaka.jp/hope/hirano/hirano.html>

大阪市平野区 <http://www.city.osaka.jp/hirano/index.html>

「大阪人」Vol.55 (2001)

おもろいで平野 <http://www.omoroide.com/index.html>

平野郷 HOPE ゾーン協議会 <http://www.oct.zaq.ne.jp/hiranohope/>

「HOPE ゾーン事業平野郷地区まちなみガイドライン」 [http://www.sumai.city.osaka.jp/media/public/download/hiranoHOPE\\_90.pdf](http://www.sumai.city.osaka.jp/media/public/download/hiranoHOPE_90.pdf)

## 取り組みの概要（目的・効果など）

- ・ 大阪市は、市内に数多く存在する歴史・文化的資源に恵まれた地区などを大阪のイメージを高めるゾーン（HOPE ゾーン）として位置づけ、地域住民と連携・協働し、地域特性を活かした魅力あるまちなみづくりを促進する「HOPE ゾーン事業」を進めている。
- ・ 平野区では、廃線した南海電車の駅舎保存運動をきっかけに、地域住民による「平野の町づくりを考える会」の活動が始まり、地域の魅力の再発見につながった。町をまるごと博物館と見立てる「平野町ぐるみ博物館」へと成長した取り組みは、15年間続けられている。
- ・ 「平野の町づくりを考える会」により、コストのかかる大型施設の建設など、ハードウェア優先のまちづくりではなく、現在ある町を活かし、「町ぐるみ博物館」というソフトウェアを使ったまちづくりが行われ、地域活性化につながっている。

## 「感覚環境のまちづくり」から見た特色・魅力

- ・ 「町めぐりツアー」を繰り返す中から、平野に固有の歴史や街並み、「音」風景の魅力を発見し、「平野町ぐるみ博物館」を作っていったプロセスからは、地域の「感覚資源」を活かしたまちづくりについて考える上での多くのヒントが得られる。
- ・ まちづくりのキーワードを、光や形を観る・観せる「観光」ではなく、町を構成している見えないものの雰囲気、気配、音、におい、人とのつながり、歴史・文化といったものを感じ伝えていく「感風」としている。同時に、外から人を呼び込む「観光」が目的ではなく、自分たちの暮らしている「まち」を、心地よい空間にすることを第一の目的にしている。
- ・ 建物の高さ制限の条例を制定する際も、大念佛寺の屋根の高さを基準にするなど、日常生活の中で働かせている「感覚」が、「まちづくり」の基準として活かされている。
- ・ 行政や企業に依存しない、という基本姿勢による自治的なまちづくりが、自由度の高いフレキシブルな組織運営となっている。

## 今後の課題・展望

- ・ 今後の「町ぐるみ博物館」活動においては、「平野の音博物館」に加え、においや光、歴史や風土といったソフトウェア、感覚資源をいかに取り込んでいくかといった展開が期待される。
- ・ 組織の「長」を定めず、博物館の企画もすべて自発的な意志と提案によるフレキシビリティの高い運営方法は、他の地域においても継続的なまちづくりを行う上でのヒントになるものと考えられる。

「感覚環境のまちづくり」を訪ねて- 8

## 「音博物館」を生んだまちづくり

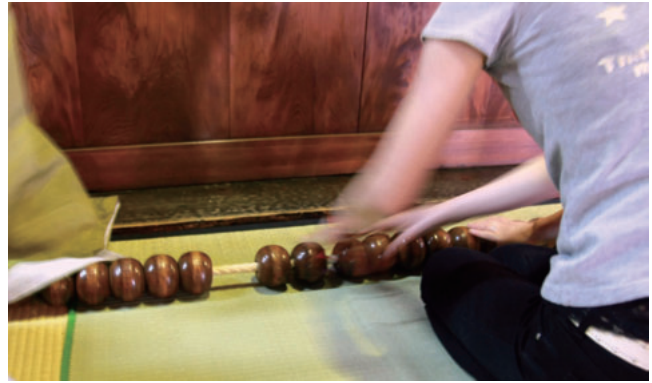
### 平野の「音」

9月16日、大阪・平野区の融通念佛宗総本山・<sup>ゆうずうねんぶつしゅう</sup>大念佛寺<sup>だいねんぶつじ</sup>の中は、「ガラン、ガタン」、「ガラン、ガタン」という不思議な「音」に満ちていた。

檜<sup>けやき</sup>でできた珠 5,400 個をつないだ巨大な数珠が、本堂の床の上に横たわっている。その数珠を、数百名の参詣者たちが手にとり、並んで座った隣人の手へと繰って回していく。数珠が床にぶつかって、「ガラン、ガタン」という音があちこちから響いている。「大数珠繰り」の行事が開かれているのだ。



大念佛寺



大数珠繰り

この数珠は、元禄 13 年 (1700 年)、<sup>だいづうしょうにん</sup>大通上人<sup>えいこう</sup>が多くの人たちから寄進を募り作成したものだという。回向の戒名や施主名が一つ一つの珠に刻み込まれ、「一人の念仏の功德が千人万人に融通して億百万ともいう大きな功德を生む」信仰のもと、ここ大念佛寺で長い歳月、数珠繰りは続けられてきた。

お堂に響きわたる、平野郷でしか聞けない個性的な「音」。

実はこの音は、大阪平野区を彩る「サウンドスケープ-音風景」の一つとして、「平野の音博物館」に収録されている。本堂に上がると、お釈迦さまの弟子の一人で、神通力にすぐれていたといわれる<sup>じゅうろくらかん</sup>十六羅漢のお一人「おびんづるさま」座像の横に、「平野の音博物館」と墨で書かれたボックスが設置されていた。

大阪市平野区、かつて「平野郷」とよばれたこの地域は、<sup>せつ</sup>摂津<sup>かわち</sup>、河内<sup>いづみ</sup>、和泉の交通の要衝として栄えた。戦国時代より自衛自治のために周囲四キロ四方を壕で囲み、環濠を配した自治都市として発展してきた。

江戸時代にはこんにゃく、繰り綿の産地としても名を馳せた豊かな商都で、そうした富の力によって連歌、茶道、能楽などの文化が人々の間に浸透した。今も日本で唯一残る連歌所、民間による初の学問所「<sup>がんすいどう</sup>含翠堂」などが残る、高度な文化都市だ。

第二次世界大戦時も空襲から免れ、今も江戸時代の町割りや商いの町の面影・古民家が街角に残っている。

全国から信者さんを集める大念佛寺から、平野町の商店街を歩いて 10 分ほど歩くと、「平野の音博物館」のもう一つの中心となっている寺院、<sup>せんこうじ</sup>全興寺<sup>せんこうじ</sup>が見えてくる。

全興寺の境内には、「平野の音博物館」と書かれたプレートと、古い電話器とがある。

受話器に耳につけてスイッチを押すと、チンチン電車の音と車掌の声が聞こえてきた。今は廃線となった「南海平野線」の音だ。その他、大念佛寺の除夜の鐘の音、杭全神社の田植え神事の音、夏祭りのだんじりの音など、平野という場所でしか聞くことのできない、地域の個性的な音が次々に聞こえてくる。町の音の他にも、平野に伝わる「やぶ入り」、「首地蔵」などの民話を、地元の老人が語る音声を聞くことができる。



平野という地域でしか聞くことのできない音を集めた「平野の音博物館」

「平野の音博物館」は、「町ぐるみ博物館」運動の一つとして運営されているサウンドスケープ・ミュージアムであり、日本初の「音をテーマにした博物館」として創られた。しかし、単に音を記録し収集しているわけではない。

「音が地域の人々の生活にとってどんな意味を持っているのかを探る、音の向こう側にあるドラマの博物館」をめざしているのだという。

### 「町ぐるみ博物館」と「まちづくり」

「平野の音博物館」は、「町ぐるみ博物館」の中の一つだ。

「町ぐるみ博物館」とは一般には聞き慣れない言葉だが、いったいどのような博物館なのだろうか。通常、「博物館」といえば、建物の中に展示がしつらえられてある様子を想像するだろうが、この博物館は既成のものとは別物だ。いわば「平野」という地域そのものが、全部そっくり博物館の機能を果たしているという意味から、「町ぐるみ博物館」と名づけられている。

町の中の古い寺、民家、神社、自転車屋、喫茶店などが、生活空間である住宅や商店を来訪者に開放している。たとえば平野映像資料館（染と織・まつや）、自転車屋さん博物館（スポーツ車の店・田川）、くらしの博物館（がんこ平野郷屋敷）、鎮守の森博物館（杭全神社）、和菓子屋さん博物館（平野郷菓梅月堂）、平野の音博物館（全興寺、染と織・まつや、大念佛寺、杭全神社、長尾家）、町家博物館・今野家（今野家）、平野郷民俗資料館・阪井家（阪井家）など、平成20年の時点で15ヶ所の常設館があり、多いときは40ヶ所が「館」と化す（図7）。

「博物館といっても、施設や展示物を整備することが目的ではありません。博物館の運営者と訪問者とのコミュニケーションを通して、住民自身が楽しみながら平野の町を再発見しようという試みなんです」と「平野の町づくりを考える会」事務局を設立した全興寺の住職である川口良仁氏は言う。

「町ぐるみ博物館」という名は、京都大学の故・西山卯三教授が評したことに因んでつけられた。平野の町ぐるみ博物館で取り組まれている試みについて、京都大学大学院で音響環境学を教える平松幸三教授は、サウンドスケープの視点からこう指摘する。

「内部の人の耳を通した平野のサウンドスケープとは何かを考察し、それを表現する手段として録

# 平野町ぐるみ博物館

平野町ぐるみ博物館以外に開催  
博物館・大連芸並びに特別展  
示館が多数あります。

8月4日曜日  
博物館・博芸スベリアルバイ  
当日は常設博物館以外に開催  
博物館・大連芸並びに特別展  
示館が多数あります。

平野町ぐるみ博物館  
TEL 06-6791-5883 FAX 06-6791-2888  
http://www.omorode.com

**平野町ぐるみ博物館**  
平野町 毎日 (13時~17時)

150年前に建てられたと伝えられる  
呉服屋の店「まつや」。店主の  
松村長三郎さんが、40数年におわたり  
記録した平野の風物や行事を映  
像と写真で紹介し、また世界でも  
稀な活動写真も展示している。



**自転車屋さん博物館**  
平野町 毎日 (9時~18時) ●定休

創業が明治28年のこの店の特色は  
注文による「手造り自転車」に  
ある。今まで300輛にもなる愛用  
り自転車や各種の部品を製作。店内にはアン  
ティークサイタル  
や各国のミニモト  
ルが並んでいる。



**南雲博物館**  
平野町 8月4日曜日 (9時~16時)

大念佛寺は徳川幕府の徳川家康、  
本堂は入道下成入の木造建築  
である。当館には南雲が死して  
いた「に女の片断」をはじめ、数々の  
南雲の掛軸がある。



**パズル茶屋**  
平野町 4-12-21 南雲茶屋  
開館日 毎日 (10時~18時) ●定休

当店の黒田誠さんがコレクショ  
ンされたパズル・模型の展示  
移動販売など古今東西のパズル  
子種の展示がある。本正風で、所蔵の  
品から新調の品、意外なものも  
見られる。



**新聞屋さん博物館**  
平野町 4-12-3 小林新聞舗  
開館日 毎月第4日曜日 (9時~17時)

「小林新聞舗」は創業が明治22年  
の大阪府内で一番古い朝日新聞  
支店である。建物はモダンなアー  
チ風の窓がある本正風で、所蔵の  
品から新調の品、意外なものも  
見られる。



**くらしの博物館**  
加藤製作 1-9-19 がんこ平野製菓  
開館日 毎日 (11時~22時) 月一回定休

代々製菓として栄えた五五家の製  
菓を土間に建てた五五家の製菓  
の「がんこ平野製菓」で、  
展示品には昔の道具や什器など河  
内内の文化や生活用品が並べられて  
いる。



**鎮守の森博物館**  
平野町 2-1-67 杵原神社  
開館日 毎月第4日曜日 (9時~17時)

貞観元年(862)に氏神としてスサ  
ノオコトを祀ったのが杵原神  
社の起りである。樹齢800年の大  
楠や、神聖な場所として大切に守  
られてきた鎮守の森は生きた博物館  
である。



**平野の音博物館**  
所在地 平野町 4-15-21 全興寺内  
開館日 土・日曜日 9:00~17:00

平野の音博物館  
館の中心であ  
る。ここでは、  
聞き覚えや音  
泉として分  
配している  
様々な音。  
CD(コンパクトディスク)で  
聞くことができる。聞き耳本  
館以外にも、平野の様々な場所  
に因んだ音を聞くことのでき  
るサテライト博物館を展開し  
ている。



**和菓子屋さん博物館**  
平野町 4-13-4 平野製菓 毎月定休  
開館日 毎日 (9時~19時) ●定休

奈良街道にあった、老舗 太子  
堂の分家。毎月定休として、  
創業より3代目、わたのきと、  
おいかけ松、十三日など平野  
町にちなんだお菓子作り。  
店内には、代々受け継がれた  
菓子の道具が展示されている。



**かつなの博物館**  
平野町 2-9-13 かつな製菓 毎月定休  
開館日 毎日 (10時~17時) ●定休

創業3代目の刀削餅屋・真  
津仁彩さんとその一門「日  
木刀削餅会」有志による「日  
常では目にする機会のない  
研削技法の公開と展示もあ  
共催と関連作品の展示もあ  
り、我が町が世界に誇る「真  
の美の極致」日本刀につ  
いて平野を解説し賞賛も  
行われて興味深い。



**ちっこいだんじり館**  
平野町 1-2-19 有田  
開館日 毎日

平野町 杵原神社の夏祭り、  
江戸時代から300年を誇る  
歴史があり今も継承され  
ています。中でも「だんじり」  
は子どもたちの心をこらえ、  
町中にお祭り気分を盛り  
上げた手作りのだんじりが数多  
くある。「水さだんじり」  
を楽しんでいたとき、7月  
13日の九町の町社だんじり  
入りにも是非お越しください。



**御菓子屋さん博物館**  
平野町 5-17 源兵衛 茶坊主  
開館日 毎日 (11時~20時)

店主が集めた道山を展示し、  
歴史の足跡もある。なかでも、  
150年~100年頃に作られたミ  
ルロースターターアップ&ソー  
サーは御子のロマンをかきた  
てられる一品。開館日には、  
明治時代の御菓子や18世紀頃  
のトルコ御菓子なども展示し  
てお楽しみいただけます。



**へつひさん博物館**  
平野町 3-12-2 長尾家  
開館日 毎日

昭和20年代、平野町近ではと  
どの家でも家族に伝えている  
つひさんは、家庭の道具がス  
ターに代わった。平野町に  
あった。薪を薪で口にくべて  
家庭に使用できるへつひさん  
店頭に並び、多くの人に  
へつひさんとして展示している。



**脚子屋さん博物館**  
平野町 5-15 コミニ子カルーム  
開館日 平日 (9時~17時)

平野町近では明治6月11日  
に「在野平野脚子  
堂」(平野町4丁目)  
に3等郵便所として開  
設。急遽を断念し、  
時代の足音と、懐かし  
い丸型スリット、懐かし  
い足音を  
展示。水の  
足音も  
聞か  
る。



**平野の音博物館**  
所在地 平野町 4-15-21 全興寺内  
開館日 土・日曜日 9:00~17:00

平野の音博物館  
館の中心であ  
る。ここでは、  
聞き覚えや音  
泉として分  
配している  
様々な音。  
CD(コンパクトディスク)で  
聞くことができる。聞き耳本  
館以外にも、平野の様々な場所  
に因んだ音を聞くことのでき  
るサテライト博物館を展開し  
ている。



**街頭藝芝居美演**  
美演時間 毎月第4日曜日  
午後2時、3時(2回)

平野の音博物館  
館の中心であ  
る。ここでは、  
聞き覚えや音  
泉として分  
配している  
様々な音。  
CD(コンパクトディスク)で  
聞くことができる。聞き耳本  
館以外にも、平野の様々な場所  
に因んだ音を聞くことのでき  
るサテライト博物館を展開し  
ている。



図7 町ぐるみ博物館リスト \* 23

音された音響資料—サウンドモノグラフ—の展示を行っている。サウンドモノグラフは、音の背後に横たわる地域の状況や人々の生活史たる物語が、音を聴く者に立ち現れ、追体験されるような音響資料である。それは、平野の歴史と住民の生活史を踏まえなければならず、また、平野の音博物館には地域住民の主体的参画が欠かせない。平野の音博物館にとって真に重要なのは、人々の意識と行動であり、それを制作する過程におけるコラボレーションを通じた人々の認識の変化であり、音環境、さらには環境一般を『風景』としてとらえようとした運動である」（平松幸三ほか『音環境デザイン』）

平野で暮らしている「人々の意識と行動」は、どのようなコラボレーションによって「認識の変化」へと到達していったのだろうか。

町ぐるみ博物館の一つ「平野の音博物館」を「音」という観点から考察するなら、何よりも重視すべきポイントは、博物館を創るために「特別な音を創ったわけではない」という点ではないだろうか。

音博物館づくりは、平野の暮らしの中にある音に気づき、その音を大切に保存していこうと考え、まちづくりのテーマの一つにすることを住民たちの間で合意していくことから始まった。平野町から聞こえてくる暮らしの音を記録し、繋ぎ合わせていく中から、平野の音博物館は生まれたのだった。

こうした、住民を主人公に据えた上で、日常生活の断片から聞こえてくる「音」という「感覚環境」をすくい上げていく気づきを積み重ね、博物館にまとめあげていく方法こそ、平野の「まちづくり」から学ぶべき大切なポイントではないだろうか。

## 平野の「まちづくり」の基本とは

大阪市平野区で展開されている、このユニークなまちづくりが始まることになったきっかけは、南海電鉄の閉鎖だった。

昭和55年（1980年）、70年もの間親しまれてきた南海電車の閉鎖が決まった。

住民の中から、平野町の最寄り駅だった「南海平野駅舎」を保存したいという運動がおこった。しかし、結果として保存はかなわなかった。

だが、駅舎の保存運動をきっかけに「まちづくり」の芽が育ち始めていった。

当初、地域住民が自分たちの暮らす町を再発見する活動を目指して「平野の町づくりを考える会」が発足。住民自身が「町めぐりツアー」を繰り返していくことで、町の魅力に気づいていった。

「そもそも私たちの出発点は駅舎の保存運動だったのですが、その時、なぜ手遅れになるまで住民が大切な駅舎の存在に気づくことなく動かなかったのかを、話し合いました。つまり、実は僕らも、当時は自分の住む町について、関心が薄かったからだということに気づいたのです。それから『町めぐりツアー』を始めました。自分たちの暮らしている町を歩くことで、いくつもの発見があることを知りました。普段は必ずしも目には見えないけれど、独特の路地の雰囲気や音やにおい、人とのつながり、環濠を配した自治都市としての痕跡や歴史を知ることになったんです。平野には、日本最古の連歌所もあれば800年を超えるクスノキもある。町の魅力を、目に見えるものだけでなく、五感を開いて再発見していきました。町ぐるみ博物館運動とは、自分の暮らしている町を、五感を使ってより良く知るための手法だったのです」

こうして「町めぐりツアー」を積み重ねていく中から、平成5年「町ぐるみ博物館」がはじまり、その流れは現在まで続けられている。

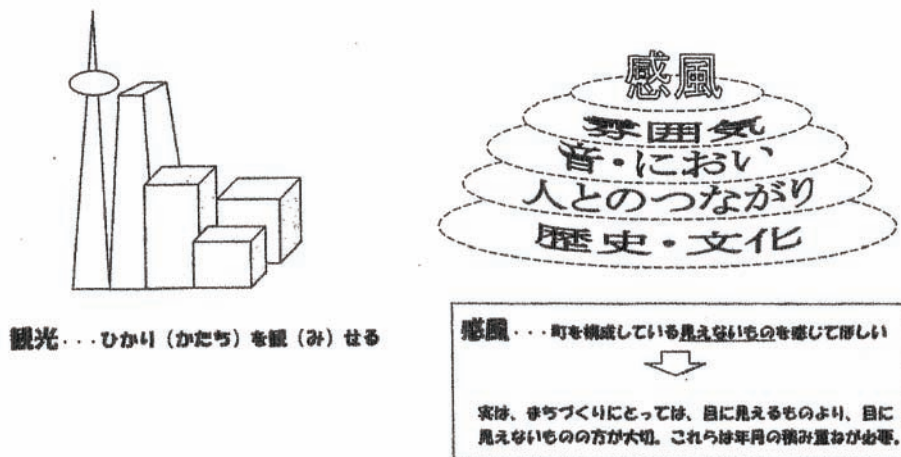
「町ぐるみ博物館」のさらにユニークな点は、行政からの補助金や、商工会などからの援助を一切受けずに、まちづくり活動を支えていく独自の取り組みとして、15年も続いてきたことだろう。

こうした「まちづくり」を持続してきた秘訣は、いったいどこにあるのだろうか。

「私たちのまちづくりは『観光』ではなく『感風』という考え方に基づいて進められています。『観光』とは、光や形を観る・観せることです。それに対して『感風』とは、まちを構成している見えないものの雰囲気、気配、音、におい、人とのつながり、歴史・文化といったものを感じていただき、伝えていくことなんです。お金をかければ、立派な設備や奇抜な建物を造って観光客を集めることは可能でしょう。でも私たちは、そうした目に見えるものよりも、むしろ、目に見えないものが『まち』を根底で支えているのではないかと考えています。そんな問題意識から出発し『感風』を大切にしていきたいと思っています」

川口氏は、平野でのまちづくりの基本を、「観光で外から人を集めるのではなく、住む人自身が励まし合って生きていくための場所作りなんです」と語ってくれた。

「町ぐるみ博物館」は、平野にやって来るすべての人びとに等しく開かれている。しかしその目的と基本は、自分たちの暮らしているまちを、いつまでも心地よく暮らしていくことのできる空間に造り上げていく「まちづくり」を進めていくことだった。外からやって来る観光客を当てにしたまちづくりではなく、自分が主人公として博物館を運営していく楽しい「まちづくり」だったことが、永く持続することを可能にしている理由ではないだろうか。



形を見せる「観光」から目に見えない「感風」を大切にしたいまちづくりへ\*24

### 「まちづくり」を持続していく工夫

「町ぐるみ博物館」を始めとする平野の独特な「まちづくり」は、これまで、どのように展開されてきたのだろうか。

そもそも、自分が住んでいる場所について、その魅力を再発見し、再確認していくためには、何らかの手法や考え方が必要だったはずだ。

「行政なり専門家が『まちづくり』に入ってやると、すぐに建物を建てたりイベントを開催して外部から人を集めようとするんですね。でも、そもそも『まち』とは、そこにまちと暮らしがあって、人が集まってくるというのが順序ではないでしょうか。まちづくりを進めていくにあたって、最初に人集めを考えるのは、話が逆なんです。そうではなく、人が集まって、それがまちになるという原則を、『まちづくり』においてもきちんと押さえていきたいと考えてやってきました」と川口氏は

\*24 平野のまちづくりを考える会



言う。

全興寺では、「平野の音博物館」の他にも、毎年大晦日に平野弁で歌う第九コンサートやライブコンサートなど、境内を舞台にしたイベントが開催されている。こうした「音」を素材にした様々な行事を通じて、人と人とを繋ぎ合わせていく試みを、持続的に行ってきた。

だが、長期間にわたって、また持続して行事を開催していくことに負担は感じていないのだろうか。

「人が集まるのには、3つの要素が大切だと思っています。まずは『おもしろい』こと。次が『いいかげん』にやること。そして『人のふんどしで相撲をとること』。この3つの要素をつなげていくことができれば、無理なく続けられますよ」と川口氏。

他にも「なるほど」と思った発想の転換があった。

平野のまちで手に入れた地図を頼りに散策を始めたのだが、どうも目的地にうまく辿り着かないのだ。きちんとした地図の一つぐらい、あってもいいのではないかと思い、聞いてみた。

すると、こんな答えが返ってきた。

「確かに、よく『町ぐるみ博物館』の地図がわかりにくい、道に迷ってしまう、という声が聞かれます。でも、私たちはそれでいいと思っています。外から訪ねられた方には、博物館を探し歩く道すら、何度でもまちの人に博物館や名所の場所を聞いていただきたいのです。なるべくたくさん平野の住民に直接声をかけ、話をしてほしい。それが、地元の人が、自分たちが意識していなかったまちのを知る機会になるんです。どんなところが魅力なのかとか、こんなものがあつたらいいとか、いろいろと話し合ってもらいたい。わざわざ外から平野を訪ねてくる理由を知ることができれば、住民が自分のまちを見直すきっかけになるんです。実は、それが『まちづくり』にとって大きな財産になっていくのだと思います」

平野のまちづくりには、いろいろな企画や行事から得られた情報が、しっかりとフィードバックされているようだ。

## 暮らしと密着した「まちづくり」

平野郷では、住民自身が楽しみながら様々な工夫を凝らしていくまちづくりが続けられてきたが、その流れに沿って、いま「景観保存」の取り組みも進んでいる。

「景観」という観点から判断し、冒頭に紹介した大念佛寺の屋根を、街並みの「標準値」として定めることになった。高さは22メートル。それ以上高い建物を建てることはできないと定めた条例が作られたからだ。

ここに暮らす人々の活動によって生まれた条例だ。

「平野郷 HOPE ゾーン協議会」では、古い街並み、平野にしかない風景を高層建築が壊してしまうのではないかという危機感のもと、40ほどの伝統的建物の修景を行ってきた。また、街並みを守っていく方法について、勉強会や座談会、展示会を重ねてきた。

「HOPE ゾーン事業」とは、Housing with Proper Environment の略だ。「地域がそれぞれの文化的・歴史的・自然的、幅広い意味での環境を活かした住宅地づくりする」という意味と、「希望 (hope)」の両方の意味が込められている。市は平成8年度から、歴史的・文化的雰囲気を残す地域として「平野郷地区」を選定し、事業化に向けて現況調査や整備方針の検討、地域住民の意向把握等を行ってきた。

平野郷 HOPE ゾーン協議会は大阪市に対し、地区計画の決定を要望。平成19年3月、「大阪市平野郷地区地区計画の区域内における建築物に関する条例」の公布が実現したという。

平野郷地区における高さ制限の条例を制定・施行させるきっかけとなったのは、平成17年の14階



平野郷 HOPE ゾーン事業区域\* 25

建マンションの計画だった。建設が強行されてしまったことを契機に、まちづくりへの影響を危惧した市民は、平野郷の街並みを守っていくためには高さ制限を行う必要がある、という結論に達した。

こうした経過を経て、「高さ制限」については、平野においてシンボリックな建築物である大念仏寺を基準にしていくことが決まっていたのだ。

最高限度は、大念仏寺の屋根の高さである 22 メートルと決まり、かつ地階を除く階数が 7 階以下とすることなどが決められていった。高さ制限だけでなく、パチンコ店や風俗店などの用途制限も定められた。

「街並みは、みんなのもの。家の中は、個人のもの」を合い言葉に、協議会を中心とした地元の市民たちが勉強会を重ねて中味を作成していった。修景のための助成事業では、大屋根と外壁のみが補助の対象だ。

景観という見かけだけを問題にしているようだが、決して、それだけに留まらない。路地や街並みの雰囲気を守り、人と人とのつながりや歴史遺産を保存し守るという取り組みがなければ、景観を保っていくことができないからだ。

「景観保存」への取り組みの中でも、平野のまちが、そこで暮らす人びとにとって心地よい「まち」であり続けるためにはどうあるべきかが問われ続けた。

その問いに対する一つの回答が、平野の人々にとって日常的に接している、大念仏寺の屋根の高さ

\* 25 おおさか・あんじゅ・ネット

を基準に定めることだった。平野の「まちづくり」を進めていくにあたって住民の「暮らしの音」が発見されたように、「景観保存」が問題になる中でも、大念佛寺の屋根が、住民にとって自然で心地よさを保つことのできる「高さ感覚」であることが発見された。

平野郷の「まちづくり」は、こうした日常生活と密着した実感から発想され、取り組まれてきた。「平野の音博物館」も「高さ制限」も、それを作り上げ決定していくときの基準となっていたのは、平野の人びとの日常的な暮らしに他ならない。

「平野の音博物館」の立ち上げに関わったメンバーの一人、西村篤氏はこう述懐する。

「集めた音ひとつひとつに人々の会話を重ねて短いドラマのように編集した。できあがったものを、町の人に聞いてもらい意見をもらった……そのうち町の人々が自分自身で暮らしの音を録音してくれるようになった。町の音については、そこで暮らす自分たちが一番よく知っているということ、みなで自覚しはじめた。会議用のテープレコーダーを回覧板のように順番に回して、日常生活の中であたり前に聞いている音を録音してもらおう試みもスタートした。たとえば、人々が一日の生活のはじまりに聞く音がいくつか集まった。食堂からは湯煎器に水を張る音や米を研ぐ音が届いた。そこに暮らす人だけが聞いている音がまだまだあった」（西村篤『暮らしの音とまちづくり（エコソフィア8）』）

西村氏は、「感覚を通して自分が世界に向かって開かれることの不思議さ、他者とのつながりの中で自分を生きることの喜び、この二つを自分の身の丈で地道に確認し続けること」が、音の博物館で与えられた課題だと言う。

こうした「まちづくり」の実践は、「感覚環境のまちづくり」を進めていくための要素とは何なのかを考えていくうえで、重要なヒントを提供してはいないだろうか。

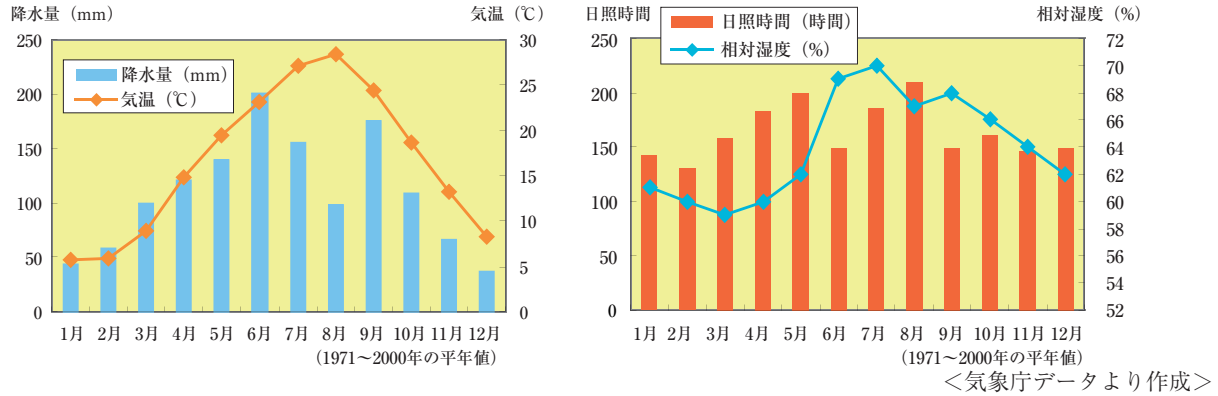
平野の「まちづくり」から学ぶべき点とは、「感覚環境」をテーマにした「まちづくり」が、必ずしも有名で名の知れた個性的な「感覚環境」を必要とするわけではないということだろう。平野の音博物館のように、全国のどこのまちからでも聞こえてくるであろう「暮らしの音」でも、その音は、平野でしか聞くことのできない固有の音として、まちづくりの素材に成り得るからだ。

「音」を「まちづくり」の主題にするからといって、特別な音が必要なわけではない。身近な「音」の豊かさを再発見する中から、感覚環境に相応しい「音」を見つけ出し、すくい上げることができれば、その「音」は固有性のある音環境へと育ち、まちづくりの主人公になれるのではないだろうか。

「平野の音博物館」の経験は、そのことを教えてくれている。

## 参考資料

### 気温・降水量・日照時間・湿度



### 大気状況

一般局（摂陽中学校）年平均値

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
二酸化硫黄 (ppm)	0.005	0.005	0.005	0.006	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.004
二酸化窒素 (ppm)	0.033	0.032	0.034	0.031	0.028	0.027	0.026	0.025	0.026	0.023
浮遊粒子状物質 (mg/m <sup>3</sup> )	0.036	0.029	0.036	0.031	0.029	0.026	0.026	0.026	0.028	0.025

<大阪市環境局企画部>

### 水質状況

生物化学的酸素要求量 (BOD) 年平均値

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
平野川・中竹澗橋 (mg/l)	17	18	18	19	15	15	15	13	11	16
平野川・安泰橋 (mg/l)	14	16	14	16	13	12	11	12	8.9	13

<大阪市環境局企画部>

### 公害苦情

(件数)

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
大気汚染	30	23	23	33	33	24	24	34	20	12
水質汚濁	0	1	2	0	0	3	0	0	1	1
騒音	20	25	59	43	36	48	60	34	50	47
振動	4	5	10	9	8	7	10	5	4	2
悪臭	27	32	48	43	24	21	22	24	12	33
土壌汚染	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
地盤沈下	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	3	14	16	6	3	12	3	1	4	3
総数	84	100	158	134	104	115	119	98	91	98

<大阪市環境局企画部>